

村松研究室

[なかなか遺産：まちやむらのアイドル]

総合地球環学研究所 生産技術研究所

<http://www.shinlab.iis.u-tokyo.ac.jp/>

専門分野：建築・都市史、都市遺産・資産開発学

建築学専攻

1. なかなか遺産の定義

Definition of "Naka-naka" Heritage

1972年に始まった「顕著な普遍的価値」を評価している世界遺産に対して、村松研究室は、腰原研究室とともに、「なかなか遺産」という概念を提出し、様々な研究活動を展開しています。

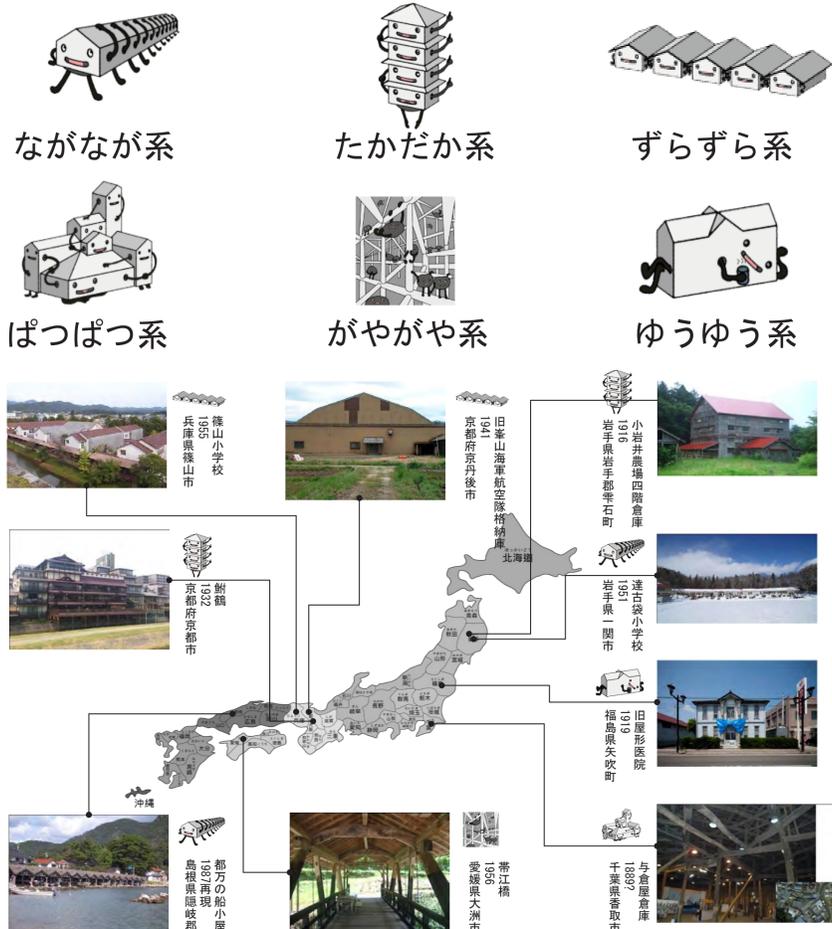
なかなか遺産とは、

- 国の重要文化財や世界遺産に認定はされないものの、どこにもない特異性を持ち一度見ただけですっと笑ってしまう
 - でも、生真面目に、地域やそれを越えた地球の環境やひとや社会やいろんなものを結びつけ、ひとびとに多様な恩恵をもたらしている
 - そのため、なかなか～！と見るひとびとを唸らせ、建造物のみならず、そのつながり全体を劣化させずに次世代に継承させたいと自然に思ってしまう
- そのような共有の財産のことです。

2. なかなか遺産の種類

Categories of "Naka-naka" Heritage

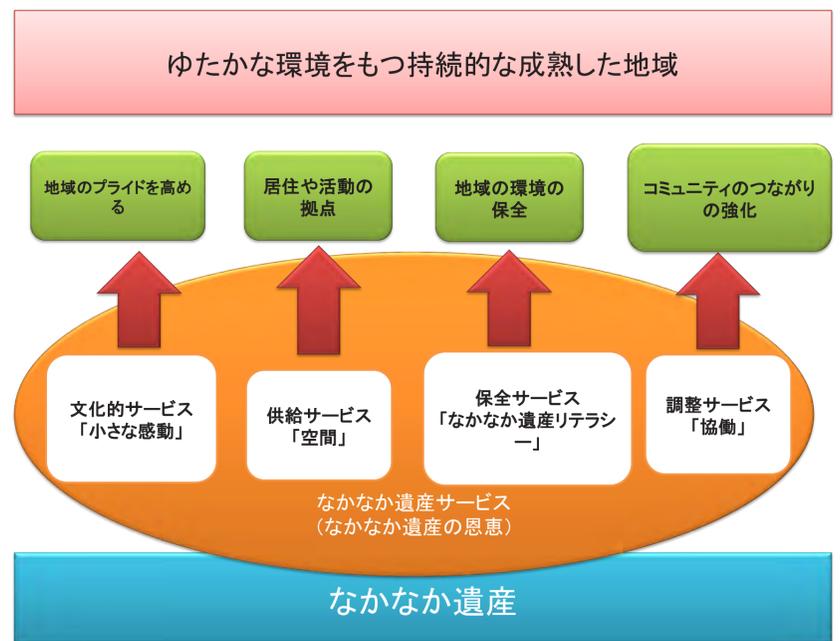
日本各地において、「なかなか遺産」を選定するのみならず、それらの特色に応じて分類します。



3. なかなか遺産の恩恵

Benefits of "Naka-naka" Heritage

上述したとおり、なかなか遺産はひとびとに多様な恩恵をもたらしています。それらを生態系サービスの考え方にならって、文化的サービス、供給サービス、保全サービス、調整サービスの四つに分類し、それぞれ具体的内容を示します。



4. 保存・活用の実践

Practice of Preservation and Utilization

東日本大震災により被害を受けた福島県矢吹町の旧屋形医院と、少子化により廃校を検討している岩手県一関市の達古袋小学校において、なかなか遺産の保存・活用の実践が行われています。



旧屋形医院・福島県矢吹町



耐震補強工事



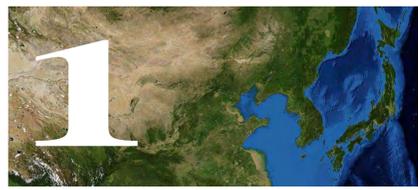
達古袋小学校・岩手県一関市



保存活用の講演会



成熟社会を支える工具としての建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

0.1 東アジアの建築史研究の誕生と進化

0.1.1 建築史、都市史とは？

建築史・都市史は、「建築、および、都市について、異なった時代、そして、時には異なった未知の地域に眼を向けることによって、新たな視点を獲得する学問である」、というのが最もシンプルな定義である。しかし、この定義には、なんの目的かが掲げられていず、そのため、往々にして、建築史・都市史は、未知の事象を詮索する建築史好事家の趣味の如く扱われてしまう。建築史も、他のどんな学問とも同様に、その存在意義を常に問い直し続ける必要がある。

建築史・都市史における、研究の目的とは、次のような4つが考えられる。

第一は、知恵の発見であって、今後のさまざまな状況に役立つ人間の対応を過去の都市や建築から探し出すことにある。

第二は、遺産・資源としての貢献である。世界遺産や重要文化財の評価、保全に建築史が役立っているのはよく知られている。これは、その地域のアイデンティティを強固にしたり、観光のために利用される。

第三は、メタ的視点、もしくは、批評的役割であって、現況の建築界、都市計画への批評的視点を提供することにある。

そして、最後は、因果関係の解明である。現在生じている現象の原因を過去に遡って発見する行為であって、しかし、この目的では必ずしも建築史研究は多用されていない。

0.1.2 東アジア近代の建築史の流れ

以上のような現代の建築史・都市史学の東アジアでの起源を探ると、国民国家の成立と密接な関係がある(図0-1-1)。日本では1877年来日した、工部大学校造家学科で建築学を教えたイギリス人お雇い建築家ジョサイア・コンドル(Josiah Conder, 1852-1920)にまでさかのぼることができる。この時期、西洋世界の建築界では歴史主義が一世を風靡して、コンドルが用いた建築教育も、歴史的、とりわけ西洋の建築の歴史様式を学ばせるものであった。

19世紀末、日本は欧化主義を経た後、ナショナリズムが強くなり、ネスト・フェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908)や岡倉天心(1863-1913)の主導で、奈良や京都の古社寺調査やその保存(1897年の古社寺保存法)が開始された。伊東忠太(1867-1954, 図0-1-2)は、岡倉天心の弟子としてこの古社寺調査や保全に専心した、日本近代の最初の建築史家である。この時期、日本はアジア大陸への拡大政策を取り、伊東忠太、および、同世代の関野貞(1868-1935, 図0-1-3)は、中国や朝鮮半島の建築調査を実施した。

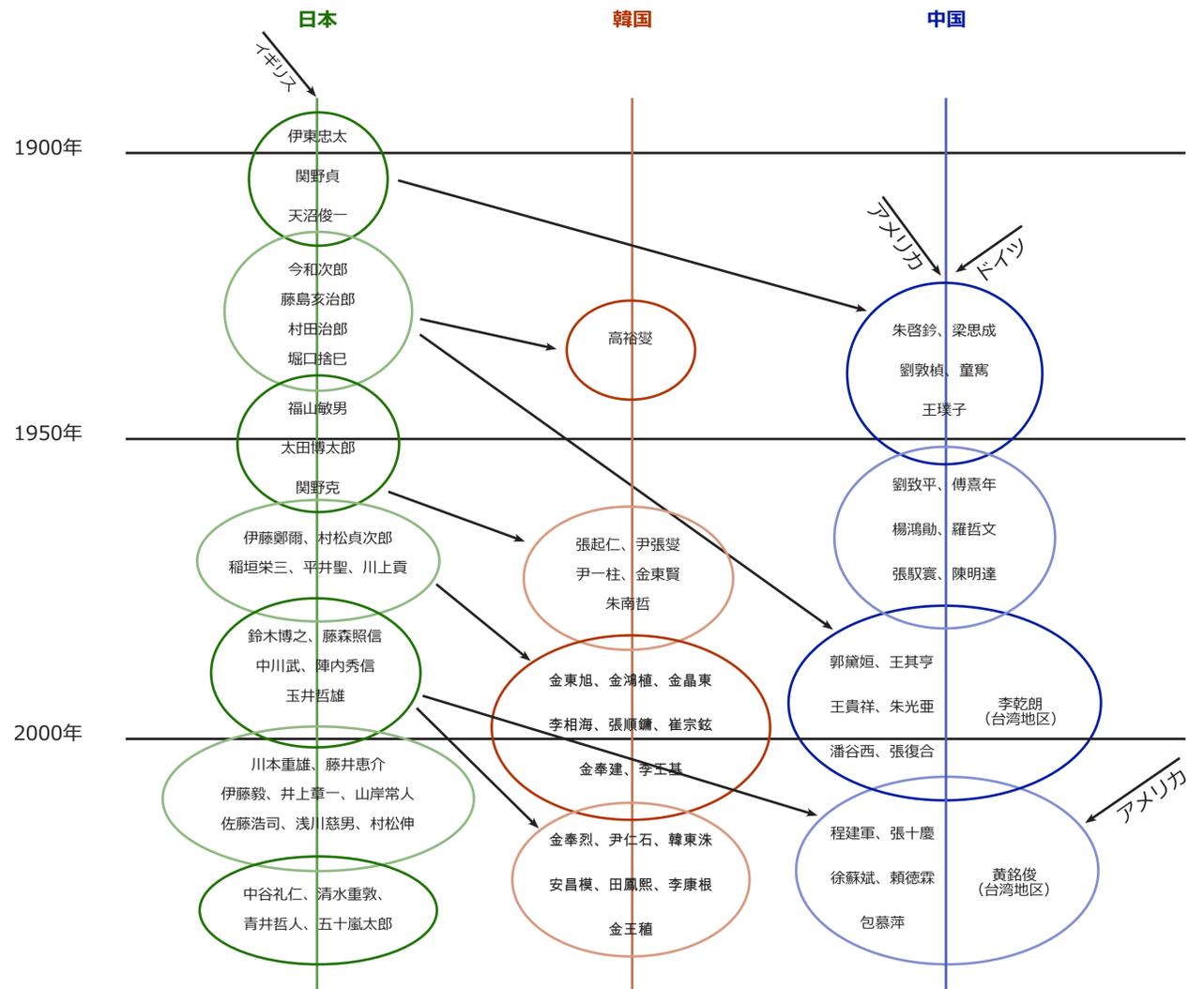


図0-1-1：東アジア建築史研究者相関年表

二世代目の建築史家の藤島亥治郎(1899-2002)、村田治郎(1895-1985)は、それぞれ京城高等工業高校(現在の国立ソウル大学工学部)から東大に、南満州工業専門学校(現在の大連理工学院)から京都大学に戻り、朝鮮、満州、台湾の建築史とともに、日本建築史を考究した。かれらの研究は、のちの東アジアの国や地域の建築史研究者の批判的に乗り越えるべき目標となった。同時代には、モダニズム建築家でもあった堀口捨巳(1895-1984)が活躍し、茶室や庭の研究を行なっている。また、この世代より少し上には、今和次郎(1888-1927)がいて、柳田国男に薫陶を受け、民家研究を開始した。

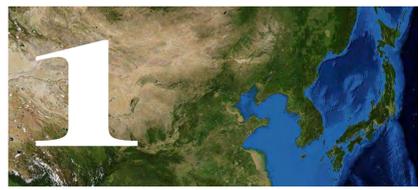
日本の建築史家の二世代目と同時代に、中国では、アメリカでボザールの教育を受けた梁思成(1901-72, 図0-1-5)と日本の東京工業高等学校で文献史学の手法を学んだ劉敦楨(1897-1968, 図0-1-6)が最初の建築史家として、中国营造学社(1929)を中心に活躍した。この時期、中国は日本をはじめとする列強諸国に浸食されていたから、彼らは中国という国家のアイデンティティを建築史という力によって主張しようと努力した。現在通用する中国の建築史の基礎は、ドイツ人エルンスト・ベルシュマ

ン(Ernst Boerschmann, 1973-1949)らの業績を批判的に継承した梁思成、劉敦楨の二人によって形作られた。台湾で建築史家が誕生したのは、李乾朗(1949-, 図0-1-7)によるものであり、藤島亥治郎の台湾建築史を発展的に継承した『台湾建築史』(1979)は、台湾の独自性を強調するために編纂されたものである。

一方、日本の現在の建築史は、伊東忠太の日本建築史を批判的に継承した、モダニズムの影響を色濃く受ける第三世代の太田博太郎(1912-2007)、関野克(1909-2001)に直接連なっている。韓国では、日本統治下で学んだ美学者、高裕燮(1905-44, 図0-1-4)が、関野、藤島の朝鮮建築史を批判的に継承し、未刊ながら『朝鮮建築美術史草稿』(1935, 図0-1-10)を著した。この著作は戦後の1964年に公刊され、尹張燮(1925-)に受け継がれ、韓国建築史として通行していく。同時代には、尹一柱(1927-85)がいて、初めて韓国の近代建築史をまとめた。彼らは民家や近代建築史の研究に貢献した日本建築史家の第四世代の稲垣栄三(1926-2001)、村松貞次郎(1924-1997)と同時代を生きた。



成熟社会を支える
 工具としての
 建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

0.1 東アジアの建築史研究の誕生と進化

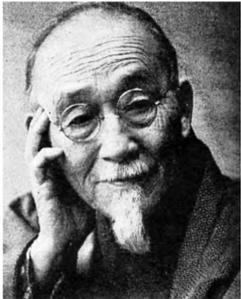


図0-1-2：伊東忠太



図0-1-3：関野貞



図0-1-4：高裕燮



図0-1-5：梁思成



図0-1-6：劉敦楨



図0-1-7：李乾朗

0.1.3 国家発展期の建築史研究：アイデンティティ、デザイン、保存

1877年、コンドルによって植えつけられた日本を筆頭とする、東アジア各地の建築史研究の約100年の歴史をまとめてみるならば、アイデンティティ、デザイン、保存の三つのキーワードに集約される。

第一はアイデンティティである。いずれの国、地域でも、建築史は、その国、地域のアイデンティティを主張するために考究された。日本建築の通史は、1900年、パリ万博のために編纂された『稿本日本帝国美術略史』(図0-1-8)の中に伊東忠太が書いたものが初めてである。現在では、太田博太郎の『日本建築史序説』(1947, 図0-1-9)が通行し、日本の建築の「独自性」、「美しさ」を強調している。

同様に、中国では、劉敦楨編の『中国建筑簡史(古代編)』(1962, 図0-1-11)が、韓国では尹張燮の『韓国建築史』(1972)が、台湾では李乾朗の『台湾建築史』(1979, 図0-1-12)が時期を経ずに出版された。いずれも、独立後の動乱から安定を模索したり、あるいは地域の紐帯を強調したりする意図で編纂されたものがあった。北朝鮮では、『朝鮮建築史』(1989)が刊行されていて、国威発揚の意図は理解できるが、なぜ、この時期であったかは不明である。

第二のデザインというキーワードは、新たな建築のデザインソースを考究するために建築史研究が要請された、という意味である。伊東忠太のアジア様式を筆頭に、帝冠様式、丹下健三の日本モダニズム、さらに現在の和風好みの建築にいたるまで、デザインと建築史は不可分の関係にある。中国でも193

0年代の宮殿式や戦後の文革建築、さらに現在の郷土建築にそれが表れているし、他の国家、地域の状況も同様である。コンドルに始まる歴史主義と建築史との関係は現在までつながっている。

第三は、建築の保存である。日本の第一世代の伊東忠太や関野貞は、1888年に設置された臨時全国宝物取調局のフェノロサや岡倉天心の指導の下、日本各地の重要建築物を鑑定していった。1897年に「古社寺保存法」が制定され、また、上記の「日本建築史」を編むための基礎的作業であった。以後、建築史は、国家にとっての重要な建造物の保全に労を尽くしていくことになる。



図0-1-8：稿本日本帝国美術略史(フランス語版)

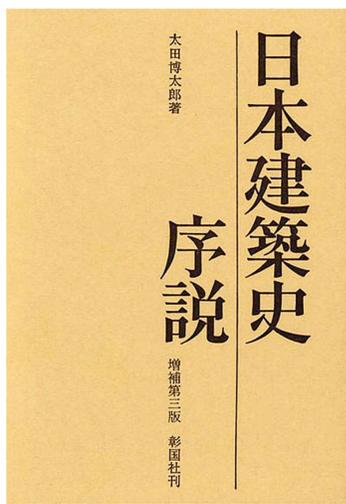


図0-1-9：日本建築史序説

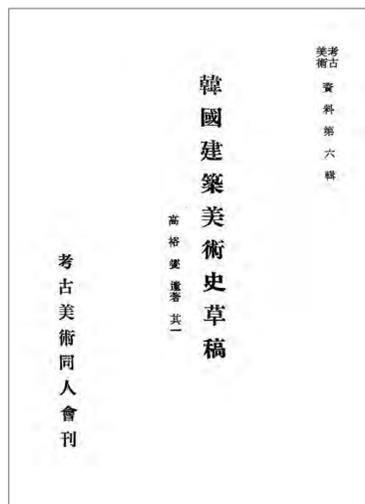


図0-1-10：朝鮮建築美術史草稿(1935)

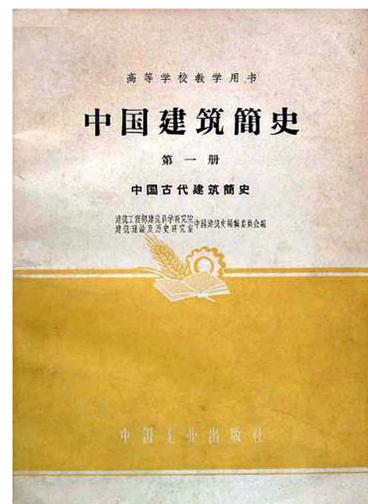


図0-1-11：中国建筑簡史(古代編)

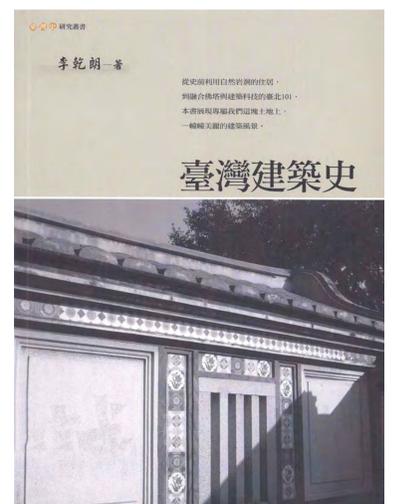
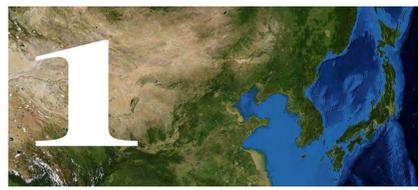


図0-1-12：台湾建築史





成熟社会を支える工具としての建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

0.2 21世紀東アジアの建築史研究の展望

0.2.1 21世紀成熟社会としての東アジア

21世紀もすでに10年以上が過ぎた。東アジアの各地の国や地域の状況は、ここ30年で劇的な変動を遂げた。高度経済成長は日本を先頭に、東アジア各国、各地へと波及していったが、その進捗はピークを過ぎつつあり、安定期に入ろうとしている。人口構成も、少子高齢化社会に突入し、世界との多様な人口流動現象が生じていることも、東アジアの状況を大きく変動させている(図0-2-1, 0-2-2, 0-2-3)。さらに、日本では、2011年3月11日の東日本大震災が起り、日本全体の社会の変動が生じてきている(図0-2-4, 0-2-5)。地球環境問題への取り組みも全世界で進んでいる。

このような時期に、建築史はいかなる役割を果たすべきか、深く再考する時に来ている。従来通りの、国家や地域のアイデンティティの確保、設計デザインへの貢献、保存・修復への献身のみでは、社会にとっても、そして、建築史自身にとっても、その有する豊かな力を十全に発揮しているとはいえないものの、それに対して多くの建築史研究者は新しい方向を見出そうと模索を続けている。21世紀の成熟した東アジアの社会を創りだすために、それを支える工具としての建築史を私たちは少しずつ変えていく必要があるだろう。

0.2.2 国家・建築・保存を超える

そのために、とりあえず大きく三つの方向性が考えられる。つまり、国家、建築、保存の三つを超える、ということである。

第一の国家を超える、というのは、一国建築史を超えて、全球まで広げること、あるいは、近隣の同質的な環境を有する東アジア全体の建築史を考える、という意味を含んでいる。それぞれの地域、国家が主張するアイデンティティは、実は近隣の地域や国家にも存在し、特殊性よりも普遍性の方が強い。それを比較、分析することによって、新たなつながりを創りだし、地球上全体での協調的言説を育てていく必要がある。

第二の、建築を超える、というのは、建築を孤立したものとして考えるのではなく、都市、自然環境、記憶などの、広い文脈の中で理解することの必要性を主張するものである。そのためには、批判的な視線を常に有し、他の学問領域との協働を考える必要がある。

第三の、保存を超える、というのは、建物の物理的実態のみだけでなく、記憶などのソフトの保存を言う。そして、さらに、保存を通して、社会、自然など、他の側面への貢献を考えるということである。



図0-2-4：東日本大震災で地震・津波による被害

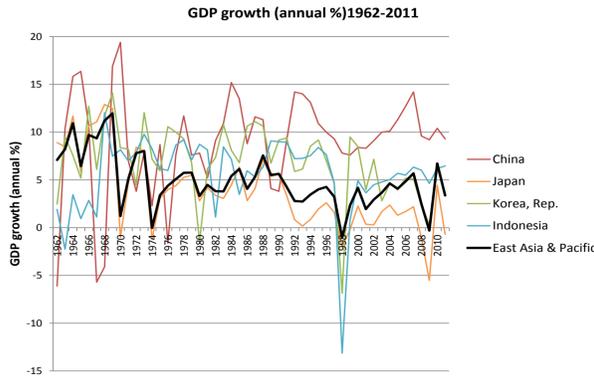


図0-2-1：東アジアの経済成長

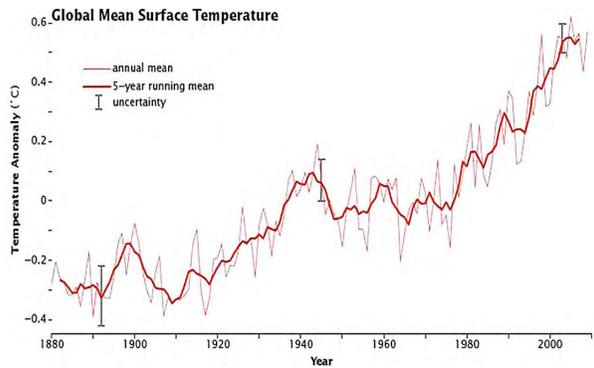


図0-2-2：地球温暖化グラフ

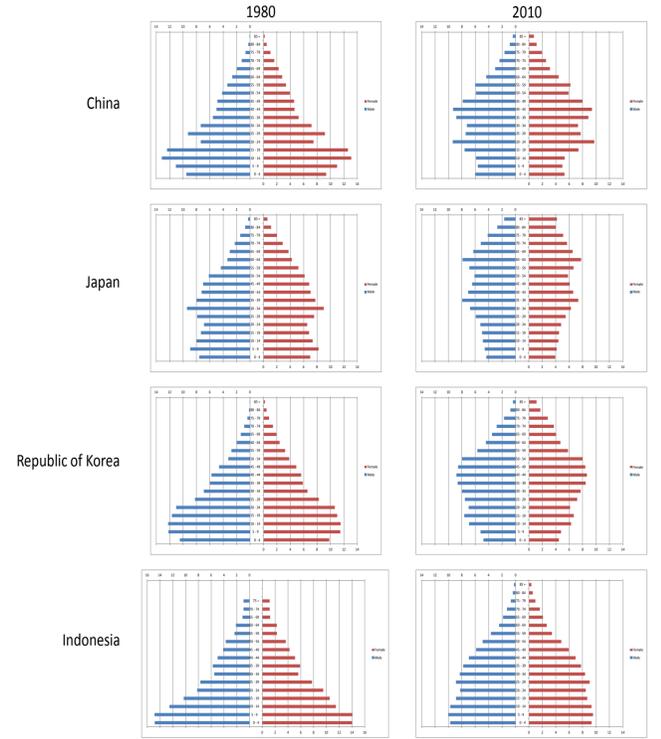


図0-2-3：東アジアの人口構成変遷



図0-2-5：東日本大震災各地の主な震度



図0-2-6：村松研究室、2012年2月14日、送別会にて

0.2.3 村松研究室の現在を紹介する

東京大学の第二工学部関野研究室に起源をもつ東京大学生産技術研究所の建築史研究は、村松(貞)研究室、藤森研究室と引き継がれ、2004年に村松研究に継承された(図0-2-6)。

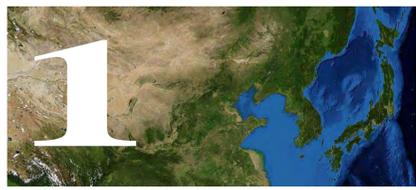
村松研究室は、上記の問題点を乗り越えるために、大きく言って、

- 1) 国家を超える：ドキュメンテーション、東アジア建築史、全球都市全史
- 2) 建築を超える：エコロジー、リテラシー、レジリアンス
- 3) 保存を超える：記憶、なかなか遺産、保全サービスの諸研究を行なっている。

本パネルは、村松研究室の2013年の現在を紹介するものである。



成熟社会を支える工具としての建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

1.1 未来に貢献する過去のドキュメンテーション

1.1.1 過去の建築、都市を発掘、記録するとは？

過去を活用したり、修復したり、物語る際には、データがなくてはならず、しかし、過去はそれほど簡単に私たちの前にその正体を現してくれない。したがって、建築史、都市史の最初の任務は、データを発掘し、それを記録することである。

伊東忠太や関野貞が行った日本や東アジアの古建築の調査（図1-1-1）、それに対抗して実施された中国营造学社の1930年代の調査、いずれもが、そののちの建築史編纂や保存に貢献している。しかし、何を発見し、どんな風に記録するかは、その時代、その社会のイデオロギーに拘束されている。一般には、より古いもの、より希少なものの、より保全がよいものが好んで選ばれた。植民地において宗主国は、全くの学術的見地から、物件を選択し、記録し、建築史を編んだり、保存したりするほど、単純ではなかった。つまり、記録することを見ることで、その時代や社会の価値観が浮かび上がってくる。

1.1.2 近代建築を記録する

近代建築は、建築史家が居住し、活動する地域の周囲に立つことから、建設活動によって消えていくことへの哀愁がもたされて記録が開始される。また、自らの建築的立場、もしくは建築家

としての位置に直接つながる建築物を、みずからのアイデンティティを強固にするために記録することも多く行われる。日本では、1930年頃から明治建築への関心が高まり、1968年の明治100年でピークに達した。以後、大正建築、昭和前期建築の記録化が始まっていく。その全貌は、村松貞次郎、藤森照信を核とした研究グループによって編纂された『日本近代建築総覧－各地に遺る明治大正昭和の建築』（1980、図1-1-2）に明らかになった。

同時期に、韓国、台湾で、近代建築への関心が高まり、さらに中国における研究の活性化に伴って、1988年～1991年にかけての「東アジア近代の建築遺産の基礎的調査研究」の実施につながっていった。汪坦（当時、清華大学）、藤森照信（当時、東京大学生産技術研究所）を中心に、中国における16都市、韓国、台湾、香港、マカオの近代の建築が各地の研究者とともに網羅的に調査された。その結果は、『全調査 東アジア近代の都市と建築』（1996、図1-1-3）に結実し、東アジアの近代建築の全容がうっすらとその姿を見せ始めた。これが契機となって各国、各地で近代建築の研究が大いに進むこととなった。

以後、村松研究室では、ウランバートル、サマルカンド、ハノイ、バンコク、マラッカ、メダン、ジャカルタなど、東アジアの周辺地域の都市の近代建築調査が展開されている（図1-1-6）。

1.1.3 データベース化の試み

これまでの東アジアにおける調査成果は、主に書籍としてまとめてきたが、以後は、『ヘイティジ・マップ』の作成（図1-1-4）、データベースの構築（図1-1-5）を実施している。それは、データが建築史の編纂や設計、特定な建築物の保存という限られた専門家に、限定的に役立つばかりでなく、さらに、多くのひとびとにとって、その地域の資源となる必要があるとの意識からである。そのためには、研究の成果を、広く世界のひとびとと共有することが必要である。

データベース化は、これまでの東南・東アジアにおける都市・建築調査の全成果をまとめることから開始され、インターネットでの公開を進めている。既に1500件を超えるデータが公開され、今後さらに都市を拡げて順次公開を予定している。調査の際のデータシートについても、可能な限り公開する予定であり、最終的な収録件数は10000件を超える。収録される物件の種類や、地理範囲、年代などは幅広く、完成すれば世界最大のアジア都市文化資源データベースとなる。

現在公開中のデータベースでは、それぞれの物件が地図上にプロットされており、収録データからのキーワード検索が行える（<http://www.weuhrp.iis.u-tokyo.ac.jp>）。さらに、京都大学地域研究統合情報センターと連携して、地図や年代からの検索もできる新たなシステムに、データを順次移行中である。



図1-1-1：関野貞の朝鮮建築調査
図1-1-2：日本近代建築総覧－各地の遺る明治大正昭和の建築(1980)
図1-1-3：全調査 東アジア近代の都市と建築(1996)

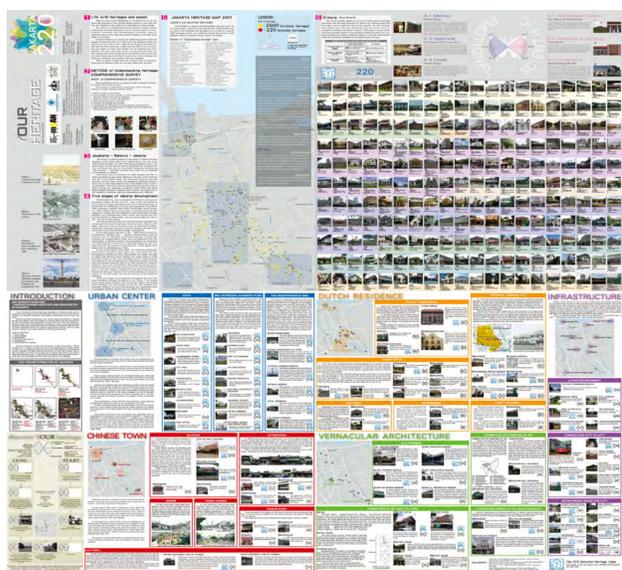


図1-1-4：ジャカルタヘリテイジマップ

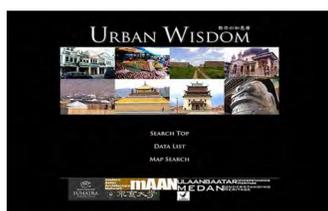


図1-1-5：データベース



図1-1-6：調査地の拡大



成熟社会を支える工具としての建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

1.2 東アジアの都市と建築を物語る

1.2.1 東アジアの建築文明圏の空間と時間

東アジアの空間は、現在、いくつかの国や地域によって構成され、行政的境界によって区切られている。しかし、それほどくっきりと他と分節できるわけではない。長江文明にまで遡る中国1万年の歴史が核となって育ってきた東アジアの建築文明圏は、その誕生に遡ってオリエントや地中海、インドなどの建築文化圏と、ユーラシア大陸や海域を通じて、強いつながりを有している。そして、また、東の朝鮮半島、日本、西の中央アジア、南のベトナム、北のモンゴルやシベリアへと影響を及ぼしている。

そのややぼんやりとした東アジア建築文化圏の空間的範囲は、うちにおいても均一ではない。建築や都市は、気候、大地、そこで利用される建築材料等によっていくつかの副次的地域の分節が生まれる。そして、それは、行政界ではなく、たとえば、中国は、草原、乾燥地、森林、稲作、高地ほどに分割でき、韓国は乾燥地と稲作に、日本は、稲作と森林に分けることができよう（図1-2-1）。しかし、これも截然と分割できるわけではなく、重層的となり、時代によって変化もしている。重要な点は、東アジアの建築文明圏は、けっして、他の文明圏から孤絶し、1万年以前から変わらぬ、統一した優れた姿があったという歴史観、空間観は、虚構であるということである。むしろ、内外で混淆し、相互に補い合って現在の建築文明の姿になったとした方が適切だろう。

1.2.2 時間的スケールとその分節

中国に文明が生じたのは、約1万年以前の長江文明に始まるとされる。それ以前の旧石器時代から現在までの長い期間を、東アジアという広大で格差のある空間の中で統一的に観ることは、簡単ではない。それでも単純化してみることにメリットの方に意義を見出したい。すると、次のような7つの時代に区分できるだろう（図1-2-2）。

各々の時代区分の設定は、とりあえず、1) 西洋建築混淆期（19世紀半ば～現在）：いかに西洋の建築文明と対峙したか。2) 伝統建築形成期（15世紀～19世紀半ば）：いかに現在の東アジアの伝統建築文化が各地で成熟したか、3) ユーラシア建築混淆期（10世紀～15世紀）：いかに、ユーラシア大陸の建築文明が、伝播してきたか、4) 東アジア波及期（6世紀～10世紀）：いかに東アジアの建築文明の古典が各地に伝播していったのか、5) 古典建築形成期（BC2世紀～6世紀）：いかに東アジアの建築文明の古典が創られたのか、6) 始原建築構築期（BC20世紀～BC2世紀）：いかに東アジアの建築文明の基礎が創られたのか、7) 先史建築誕生期（BC20世紀以前）：いかに東アジアの建築文明は開始されたか、としておきたい。

1.2.3 東アジア建築文明圏の特色

時間的長さでは長江文明の1万年以前から、空間で言えば、地球上の陸地面積の8%を占めるこの東アジアの建築文明圏をどの

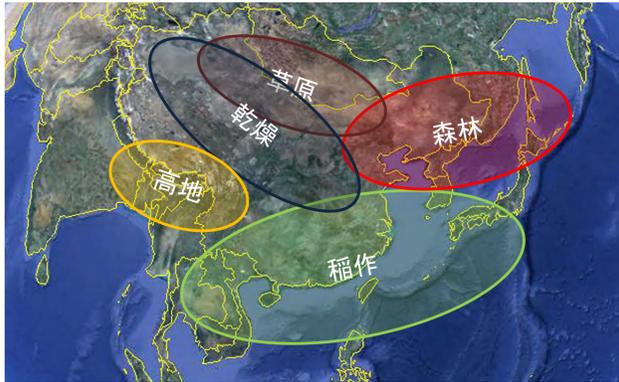


図1-2-1：東アジアの空間とその地域分節

	中国	朝鮮半島	日本
現在	中華人民共和国 中華民国	北朝鮮、韓国 日本植民地	昭和・平成 大正 明治
19世紀半ば	清	朝鮮王朝	江戸時代
15世紀	明	高麗	室町時代 鎌倉時代
10世紀	宋、元 五代十国	渤海 統一新羅	平安時代 飛鳥、奈良時代
6世紀	三国、南北朝 前漢、後漢	三国時代(高句麗、新羅、百濟) 原三国時代	古墳時代 弥生時代
BC2世紀	周、秦 商 夏	新石器時代	縄文時代
BC20世紀	文明の開始、長江文明、黄河文明		

先史建築誕生期

図1-2-2：東アジア建築・都市の1万年（2013.5.4 村松伸作成）

ように統一的に叙述すべきか、現在のところ明らかでないし、誰も試みていない。あるいは、そもそも統一的に物語ることは不可能なのかもしれない。しかし、この建築文明圏の様相は、東南アジアとも、インドとも、中東とも、アフリカとも、そして、東欧、西欧、南北アメリカとも異なっていることは、明らかだ。

東アジア建築文明圏と他の建築文明圏との相違を一言で述べれば、「木造」を主とすること、そして、「自然の活用」、そして、「秩序の可視化」であろう、と私は考える。「木」は、東アジアの中心地域に無尽蔵に存在した素材である。それを基礎にこの建築文明が形成され、それは、構造、意匠、生産組織に影響し、環境に適応した形で進化してきた。法隆寺金堂（日本奈良県、670年頃）、南禅寺大仏殿（中国山西省、782年）、浮石寺無量寿殿（韓国慶尚北道、1376年）など、各地域で最古の木造建造物を並べてみると、その相違があり、その相違を読み取ることが東アジア建築史のだいご味であろう（図1-2-3）。

二つ目の「自然との共存」は、木を建材として使用したことの

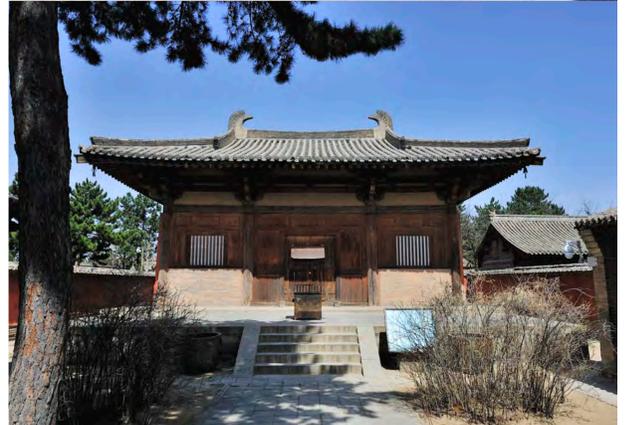


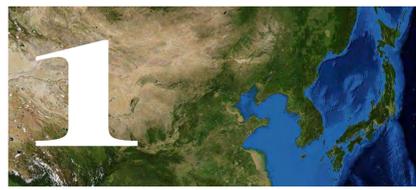
図1-2-3：法隆寺金堂（上、日本奈良県、670年頃）、南禅寺大仏殿（中、中国山西省、782年）、浮石寺無量寿殿（下、韓国慶尚北道、1376年）

みならず、自然と共存することを、建築や都市の理想としたことである。三つ目の特色で述べる「秩序の可視化」は、東アジアの広大な空間を統治するために、建築や都市が利用され、そのための配置、装飾が成長してきたことを言っている。オリエントやエジプト、インド、地中海の等の他の建築文明圏でも、統治と建築や都市と密接な関係があるものの、より巨大な富、人口や多様な異質性が内包された東アジア建築文明圏には、秩序の可視化が建築や都市に強く要請され、さらにそれが継承されて強固になったのではないかと、ここでは仮説的に述べておく。

これらの特色を有する東アジアの建築の長く広大な範囲の歴史をどのように物語るかの問いに、暫定的に答えるならば、従来の都市、宮殿、住宅、仏教施設などという建築類型での比較では、現代社会との接点や、ここで主張している〔建築を超える〕こととは繋がってこないだろう。新たな視点—たとえば、大地との関係、環境（自然、水、光、風、湿潤など）との関係、価値観（秩序など）の表現—とともに、従来の構造、表現、設計手法、生産体系など—を物語の核にすることが考えられようか。



成熟社会を支える工具としての建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

1.3 全球都市を分析する

1.3.1 全球都市全史

国家を超えた東アジアの建築や都市の現象も、実は全球的な建築・都市の流れの一部でしかない。東アジア建築の有する特色や普遍性を理解するためには、全球的な視野が必要となる。さらに、現在生じているさまざまな問題を認識し、その上で解決するためには、ミクロなスケールでの掘り下げと同時に、グローバルで、かつ、その始原からの変容を相対としてとらえることが必須となる。しかしそれは、フレッチャーの建築史のように、各国建築史の集合ではない。

そこで私たちは2008年から、1万年の時間の中で全球の都市、および建築がどのような変容をたどってきたかを解明する全球都市全史の研究を実施している。まず、都市人口がどのように拡大してきたか、全球的に可視化することから開始された(図1-3-1)。2006年、都市人口は世界総人口の半数を超え、地球環境問題を考える際、都市との関係はますます重要となってきたからである。

1.3.2 都市の立地と人口動態

人口規模の上位115都市の4000年の人口動態を観察すると、18世紀以降、各都市で人口が急増していくことがわかる。1950年頃に人口1000万人以上のメガ都市が誕生している。また、その中から12都市を選んでその人口動態をさらに詳細に見ると、3世紀前後に人口増が進むローマ、イェルサレム、15世紀前後に人口が増えるカイロ、パリ、サマルカンド、15世紀以降に増える、江戸、ジャカルタ、コペンハーゲンなど、人口増加は必ずしも都市で均一ではないことがわかる(図1-3-2,1-3-3)。

1.3.3 メガ都市の姿

現在、人口1000万人以上のメガ都市は、東京圏の3500万人を筆頭に地球上に17を数えることができる。その多くは熱帯地域に存在し、かつ、植民地を経験した発展途上国の都市が多数を占める。空間的に1000km四方を越え、既存の行政境界を跨ぐことから、その実態を把握することは容易ではない。現在、村松が代表となる、総合地球環境学研究所(日本、京都)のメガ都市プロジェクトでは、17の都市を人口密度分布、居住環境類型などによって比較し、実態を解明しようとしている(図1-3-5,1-3-6)。

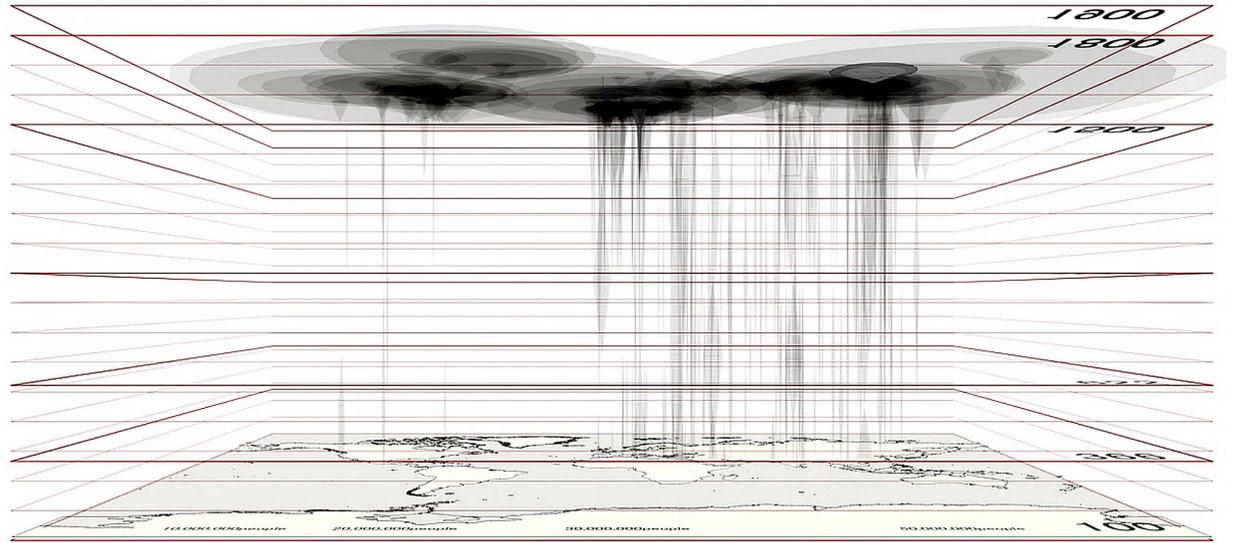


図1-3-1: 全球都市4000年の人口変遷図(地球研メガ都市プロジェクト作成)

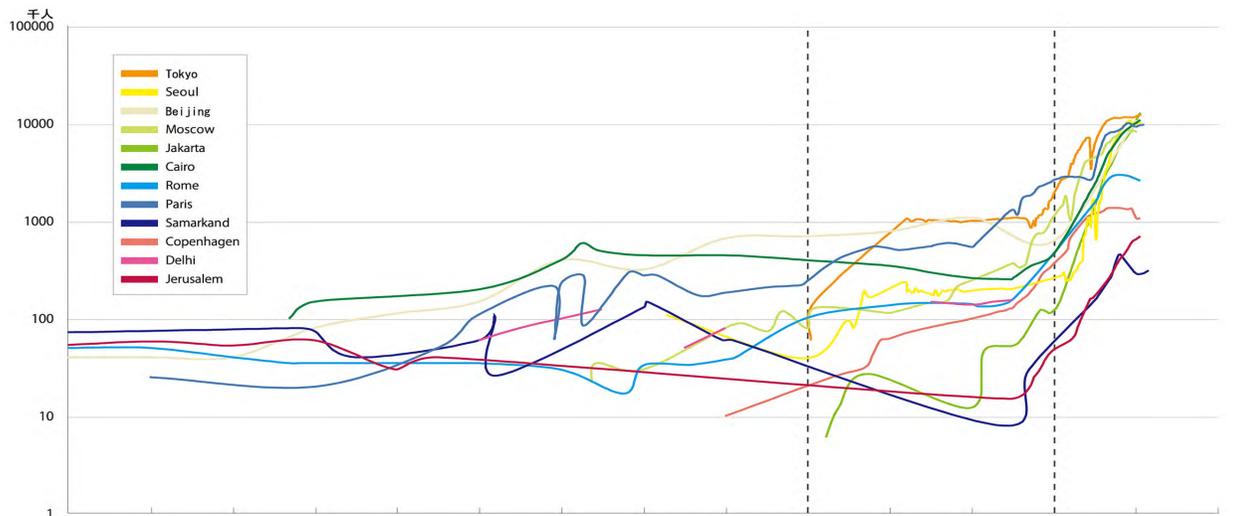


図1-3-2: 世界12都市における人口の推移(地球研メガ都市プロジェクト作成)

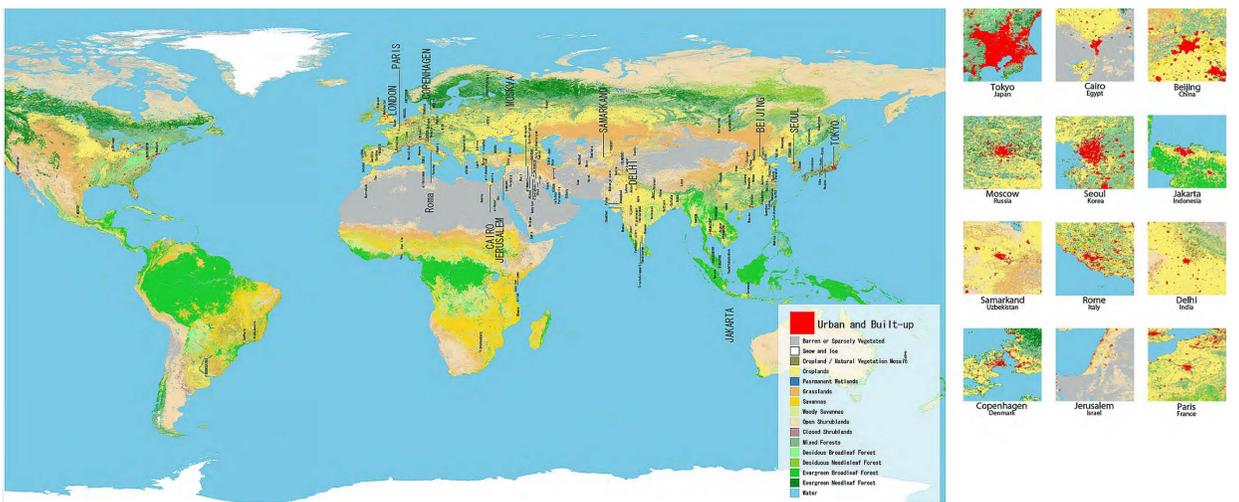


図1-3-3: 全球土地被覆分類図(東京大学生産技術研究所竹内研究室所蔵)



図1-3-4: 17メガ都市の居住環境類々の分類(共通項と特色)

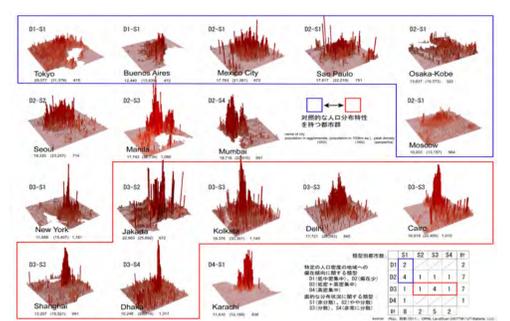
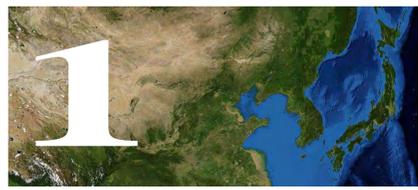


図1-3-5: 17メガ都市の人口密度分布とその類型



成熟社会を支える工具としての建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

2.1 エコロジー

2.1.1 エコロジーとしての建築

ローマ人建築家ウィトルウィウスが著した『建築十書』（BC.1世紀頃）は、世界最初の建築書としてつとに知られ、ここでは、よい建築とは、用（機能性）、強（強靭性や耐久性）、美（美しさ）を兼ね備えているものだと記されている。しかし、作り手である建築家のみが有する美の押しつけとその集合体全体（景観）の不釣り合い、強靭性や耐久性に対する過度の信頼の無残な崩壊、限定された機能のもつ非効率性など、ウィトルウィウスへの信奉が建築界にもたらした結果が、別の問題を多々引き起こしてきていることを、私たちは知っている。

地球上に存在しているのは、建築物だけではないし、地球は私たちの世代だけのものではない。1992年、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された「環境と開発に関する国際連合会議」では、「持続可能な開発」が焦点となった。そこで私たちが理解すべきは、建築は、人工物全体、すなわち人工環境のひとつでしかなく、さらに社会・経済環境、自然環境の中にさまざまなつながりを持って存在すること、地球の持続可能を配慮すること、すなわち、エコロジーとしての建築への関心である（図2-1-1）。そして、この考えに対して建築史、都市史が貢献できることは、1) 多様な環境の構成要素が都市の中に共存することの提示、2) それぞれのつながりを、可視化し、また、その実態を明らかにすること、であり、私たちはこの追及を、建築を超える第一歩の方策として進めている。

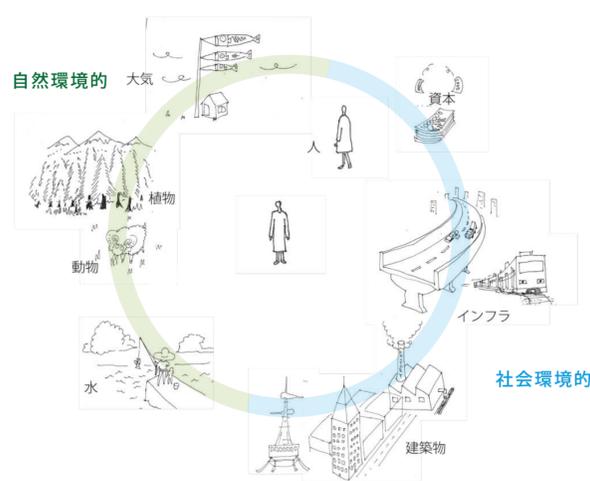


図2-1-1: エコロジーとしての建築

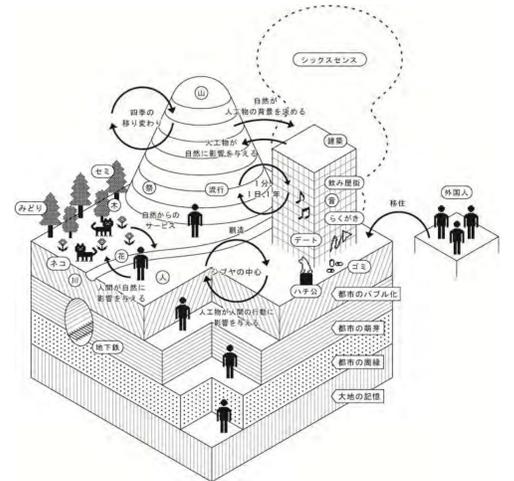


図2-1-2: まちの資源

2.1.2 シンヤ遺産と京都・岡崎百人百景

「エコロジーとしての建築」を考えるには、ある限定された空間に建築と共存してどのようなものが存在しているか、をまず明らかにする必要がある。村松研究室では、これまでに東京の中心の一つである渋谷と京都の文化的中心のひとつである岡崎のふたつの異なった空間を、異なった手法で、探索した。

シンヤ遺産プロジェクトは、村松研究室の学生たちとともに、シンヤの中心から半径1kmの円内を徹底的に歩き、そこに存在する多様なもの（「まち資源」）を採集することから始めた。建物はもとより、緑、猫、さまざまな業種のひと、音、匂い、異なった長さの時間などが、どのような形式で都市の中に存在しているかを、明らかにした（図2-1-2）。

一方、京都・岡崎百人百景プロジェクトは、古都京都の文化的中心地のひとつ、岡崎で、136人の参加者に27枚撮影可能な使い捨てカメラを手渡し、自由にまちを撮影してもらうものであった。136人の各々の関心と異なった撮影技量によって撮影された3600枚の写真からは、一般のひとびとがいかに異なった視点を持っているかが、鮮明に理解できた。都市の中には、建物だけでなく、水、ひと、緑、動物、様々なものが含まれ、その多様な要素を人々は認識している（図2-1-3）。

2.1.3 「環境への文化的適応」の発見

エコロジーとしての建築史の役割のもうひとつは、環境を構



図2-1-3: 京都・岡崎百人百景

成する要素間のつながりを、可視化し、また、その実態を明らかにすることである。自然環境と社会・経済環境、人工環境の三者の間に三つの関係が存在するが、建築や都市の物理的実態に高い専門性を有している私たちは、自然環境に対して建築や都市がどのように対応してきたか、あるいは、社会・経済環境に建築や都市がどのように対応してきたかに、強い関心を持っている。これを「環境への文化的適応」と呼ぶことにする。

とりわけ、現在私たちが関心を持っているのが、自然環境に対してどのように人間は、建造物を介してゆっくりと文化的適応をしてきたか、についてである。風景、水、風、光、音などに対して、現在、高度な技術をもって対応しているが、それは過度な環境負荷をもたらしている。しかし、過去において人間は長い時間をかけて「環境への文化的適応」をおこなってきた。それを解明することで、環境負荷の低い人工環境を生み出すことの可能性を示すことなるだろう（図2-1-4）。

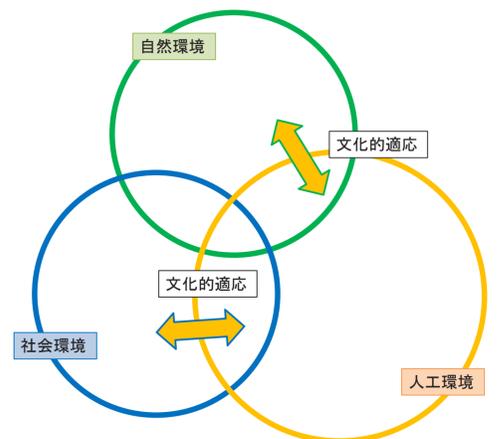
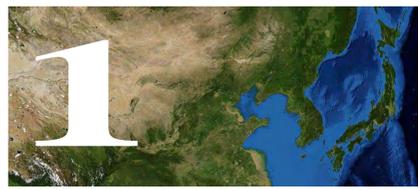


図2-1-4: 自然環境と社会環境、人工環境の関係



成熟社会を支える工具としての建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

2.2 リテラシー

2.2.1 まちリテラシーとは？

建築や都市の改善をするには、建築家の専門的な知識だけでなく、一般のひとびとの関心と関与が重要である。ひとびとの日常のまちに対する関心や関与の能力を、私たちは「まちリテラシー」と呼び、その能力の開発に取り組んでいる。つまり、建築を超える第二の方策は、建物や都市の物理的な側面へのデザインという関与ではなく、関与する能力への働きかけである。

まちリテラシーは、①まちを観察するスキル、②まちの未来を構想するスキル、③構想したまちの未来に向かうために責任をもって関与するスキル、という観察・構想・関与の三つのスキルから構成される(図2-2-1)。①のまちを観察するスキルに関しては、福島県須賀川市やインドネシア・ジャカルタでのヘリテージマップの作成(図2-2-2)、前掲の京都・岡崎百人百景プロジェクトで、そのスキル向上のプログラムを実施した。まちリテラシー全体に関しては、以下、紹介する小学生へのプログラムを開発して実施してきている。

2.2.2 ぼくらは街の探検隊

2004年から始まって、現在9年目となる「ぼくらはまちの探検隊」プログラムは、このまちリテラシー開発の基点となったものである。渋谷区上原小学校の6年生に対して、東京大学建築

学科の大学院生が主となって、毎年4月5月の二か月間の40時間を使い、小学生と大学院生がまちリテラシーを相互に育て合うプログラムである。

子どもたちは、大学院生を隊長とする5~7名のチームを編成し、初回到村松博士から出されたまち環境に関する不思議な「指令」を解読すべくまち探検に出かける。大学院生や地域住民、専門家からのヒントをもらったり、地形や古地図について学んだりしながら、まちで色々なものを発見し、指令を解読し、大学のオープンキャンパスでの最終発表会に向けてまちをよりよくするための提案や意見をまとめていく。

2013年度には、教育学からのまちリテラシーの検討がなされ、プログラムの向上をはかっている。また、日本以外でのプログラムの実施も計画されている。

2.2.3 伊東こども建築塾

建築家・伊東豊雄が2011年春、開講した伊東建築塾では、小学校高学年の児童を対象にした「子ども建築塾」を行っている。塾長の伊東豊雄氏、副塾長の太田浩史氏(東京大学生産技術研究所)とともに、村松研究室がこのプログラムに関与している。一年間のコースの前期は「いえ」、後期は「まち」をテーマに、20名程度の塾生が建築の基礎を学ぶ。前期の「いえ」

では、子どもが元々持っている身体性や発想を伸ばすこと、後期の「まち」では、建築と社会との関わりを学ぶことを基本に、各10回のカリキュラムが組まれている。

村松研究室では、前掲の「ぼくらはまちの探検隊」プログラムの経験を活かし、2011年度の後期から、主に「まち」の授業の企画・実施に関与してきた。また、「建築」という明確な軸をもった「子ども建築塾」に、当研究室も多く学んでいる。

「建築」という言葉は、建物それ自体と、建てる行為の、両方の意味をもつ。すなわち、もの・空間を考えながら、プロセスと、その結果として生まれるさまざまな環境との関係性を考える必要がある。このことを、感覚的につかむために、私たちは「まちと会話する」という表現を使い始めた。つまり、まちのエコロジーを理解するということである。しかし、この表現はまだ、子ども達にとっても、私たちにとっても、難しく、さらなるプログラムの向上を図る必要がある。

建築史・都市史を専門とする私たちは、建物やまちに耳を傾けることを専門とする。さらに、必要なのは、「建築を超える」と同時に、建築に戻ることである。伊東こども建築塾での私たちの試みには、エコロジー、リテラシーによって「建築を超える」ことと、再び、建築に貢献するという二重の挑戦が込められている。

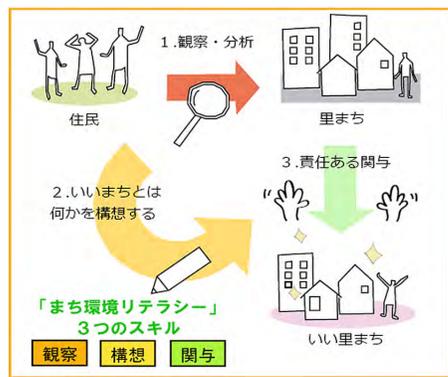
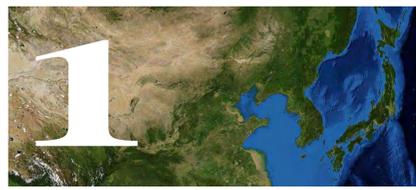


図2-2-1: まちリテラシーの構成

図2-2-2: 福島県須賀川市のヘリテージマップ



成熟社会を支える工具としての建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

2.3 レジリアンス

2.3.1 レジリアンスとは？

とりわけ都市を考える際に、その動的な変異を評価する視点に、レジリアンスがある。アンドリュウ・ゾッリ『レジリアンス：復活力』（ダイヤモンド社、2013年）によれば、レジリアンスは、「システム、企業、個人が極度の状況変化に直面したときに、基本的な目的と健全性を維持する能力」（10ページ）と定義できる。レジリアンスを向上させるためには、ゾッリによれば、ふたつの方法があり、1）回復不能なダメージを被りかねない領域に押しやられないような抵抗力を身につけること、2）閾値を越えてしまったときに、システムが健全に適應できる領域を維持し、拡張すること、なる（12ページ）。

建築史は、過去からこの高いレジリアンスを有した事例やその反対の失敗例を拾い上げ、そこから得た方策を未来へと役立てることである。つまり、建築や都市という物理的実態ではなく、そのものが有しているレジリアンス（自発的治癒力）を発掘することが、建築史や都市史の今後の任務となる。

2.3.2 災害と建築史

2011年3月11日に東北地方を中心におこった東日本大震災では、震災、津波被害、そして、原発被害などが相乗的に押し寄せた。この大災害に対して、一個人として、そして、専門家として貢献する必要があることを、私たちは強く実感した。では、建築史、都市史という専門領域ではどのようなことができるのだろうか。1）被害を受けた文化財を救済する、2）未来のために現在を記録する、3）過去の震災を受けた都市や建築の事例を発掘し、そこにレジリアンスを発見すること、などであろう。

私たちは、震災から3か月たった2011年6月11日に、岩手県大槌市に赴き、津波の大きな被害を受けたまちの惨状を、ひとつひとつの建物について写真を撮ることによって記録した。そこには被害と同時に、3か月間にそこの人々がなした強靱な対応も含まれている。以後、半年毎に定期的にまちの写真を記録して、その変化を記録している。

2.3.3 まちのレジリアンス

まちの持つレジリアンスは、時代や地域によって大きく異なる。戦後日本の都市は、河川堤防や防潮堤防、港湾整備などの公共事業によるインフラ整備によって災害に対するレジリアンスを高めてきた。つまり、ゾッリのいう1）の方法である。しかし、東日本大震災では閾値を越えて津波が市街地に入り込み、大きな被害を受けてしまった（図2-3-1）。それゆえ、今求められるのはゾッリのいう2）の方法（「システムが健全に適應できる領域を維持し、拡張すること」）であるが、インフラ整備の効果もあって戦後大きな災害による被害を免れてきた日本社会において、以前の社会が有していた2）の方法によるレジリアンス獲得のための素地が損なわれてしまったといえる。

私たちが現在行っている過去の災害復興に関する歴史研究は、過去と現在の社会状況の差異を踏まえて分析することで、震災前のまちにおけるレジリアンスを問い直し、過去を参照しつつ新たなレジリアンスを獲得するための手掛かりとなるものと考えられる。



図2-3-1：東日本大震災により大きな被害を受けた市街地（津波により防波堤の破壊） 撮影：浅川敏

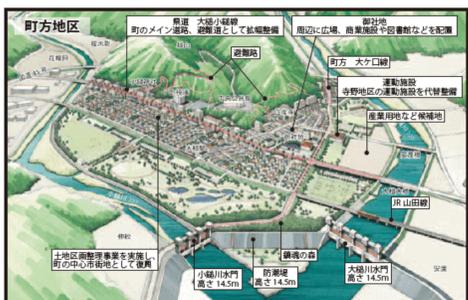


図2-3-2：東日本大震災からの復興まちづくりイメージ（震災前の倍近い高さの堤防が建設される計画となっている） 資料：大槌町ホームページ



図2-3-3：東日本大震災後の被災地（断水した被災地において生活用水として沢水を利用していた） 資料：村松研究室撮影



図2-3-4：東日本大震災後の山道の利用（低地の道路が瓦礫で通行不能となったが、山越えて集落を繋ぐ山道が活用された） 資料：村松研究室撮影

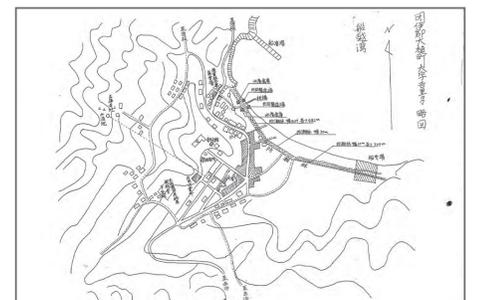
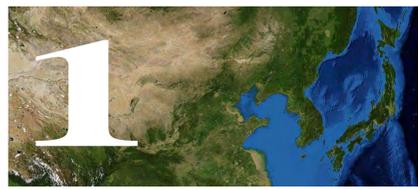


図2-3-5：昭和三陸後の吉里吉里の復興計画（過去の津波浸水高さを踏まえた高所移転および産業組合を中心とした産業復興が計画された） 資料：地井昭夫「漁村集落計画 漁村集落の特質と計画課題」『新建築学体系18 集落計画』、1986年



成熟社会を支える工具としての建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

3.1 批判的遺産学

3.1.1 批判的遺産学

ひとは、1) なぜ、2) 何を、3) いかん保存するのだろうか。そして、4) その価値をどうやって評価されるのだろうか。建築の保存に関心を持つ私たちにも、この概念についてさまざまな疑問が湧いてくる。通常、一般の人々に強く関心をもたれるのは、「2) 何を保存/保全するか」であり、また、多くの専門家にとっては、「3) いかん保存/保全するか」の、技術的、手法的問題である。

だが、「1) なぜ、保存/保全するか」、については、ほとんど関心もたれないか、あるいは、鬱陶しいと耳をふさいで拒否反応を示されるのが落ちである。また「4) いかんその価値を評価するか、についても、総合的な指標がない。近年、異なるジャンルからの遺産への関心、非西洋の論理をくみ取ろうとする姿勢などが出現し、建築遺産への通念を異なった視点から見るとする動きが巻き起こってきた。それを「批判的遺産学 (Critical Heritage Studies)」(<http://criticalheritagestudies.org.preview.bimero.se/>) と呼び、国際的なネットワークができつつある。私たちは、世界各地で同時多発的に生じたこういった動きに同期しつつ、新たな視点から、保存の1) なぜ、2) 何を、3) 如何にを問い、価値を4) いかん評価するか、を異なった角度から深めていくことにしている。

3.1.2 なぜ、保存するのか。

人間と保存は不可分の関係にある。たとえば、種の保存、情報の保存、食料の保存、環境の保存などが、日常的に使用される保存であって、それぞれ、種の繁栄 (種の保存)、未来への指針 (情報の保存)、生存の安定 (食料の保存、環境の保全) を企図したものである。直接的、間接的な違いはあるものの、最終的には人類のサステナブルな繁栄をうながすが、この保存という概念の本質である。

ただ、問題なのは、この最終目標 - 人類のサステナブルな繁栄とのリンクがしばしば失念されてしまい、保存対象そのものの保存 (建築のための保存) やナショナリズムの高揚、経済的利益の獲得などに、保存が直結してしまうことである。3.3で述べるなかなか遺産は、地域のさまざまな要素 (コミュニティ、自然環境、誇り、福祉など) への影響を通じて、社会を動かそうとする新たなコンセプトである。

3.1.3 何を保存するのか。

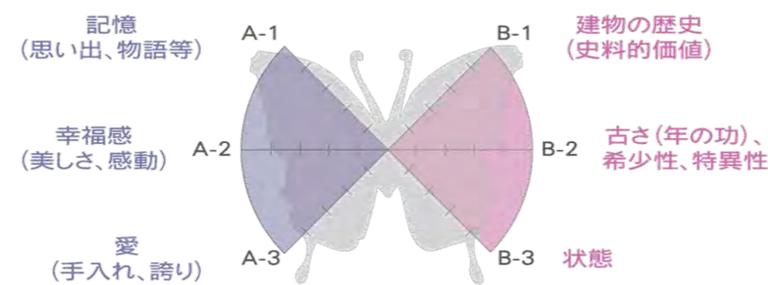
何を保存するかは、少なくとも二つの対立軸がある。1) 物理的側面の保存 vs. ソフト (機能、記憶等) の保存 vs. エコロジー (つながり) の保存、2) 人類の遺産 (世界遺産) vs. 国家の遺産 vs. 地域の遺産 (なかなか遺産) である。前者の対立軸は、3.2で、後者の対立軸は、3.3で詳しく説明される。

3.1.4 如何に保存するのか。

如何に保存するかは、1) 保存、保全、復元という思想的差異、2) 市民主導か、行政主導か、専門家主導か、の論点に波及する。前者は、技術やデザイン (リノベーション)、制度につながり、後者は、ボトムアップ (市民主導) か、トップダウン (行政、専門家主導) かの異なった手法がある。しかし、これらは対立的ではなく、相互補完的でなくてはならない。いずれにしても、こういったことは、既存の教科書を神格化して学ぶのではなく、現場でゼロから考え抜き、そこから新たな普遍的な論理を導くのが大切である。

3.1.5 如何に遺産価値を評価するか? -ヘリテイジバタフライとなかなか遺産サービス

これまで、遺産の価値はそれほど、全体的に、かつ、構造的に考えられてこなかった。建物が壊されてしまうのは、専門家 (建築史家) の独断的な建築史的評価からのものが多い。様式の重要性、年代 (古さ)、あるいは、誰が作ったか、など、現実の社会とはやや乖離した評価軸があいまいな形で使われている。そして、それゆえ、なかなか保存の意義が社会に浸透しない。村松研究室では、専門家と一般の人々との双方が異なった価値を示すことを表した「ヘリテイジバタフライ」や遺産が社会の異なる側面への影響があることを示す概念「なかなか遺産サービス」(3-3) を考案して、遺産の価値を可視化しようと試みている。



- ・ヘリテイジバタフライ (評価軸)
- ・右側 (専門家の価値) と左側 (一般の人々の価値)

(注)ヘリテイジバタフライは、指標化に参加したグループの価値の反映であって、絶対的な評価ではない。

図3-1-3: ヘリテイジバタフライ



図3-1-1: 「批判的遺産学」のウェブサイト



図3-1-2: 福岡県矢吹町旧屋形医院の保存・活用の実践

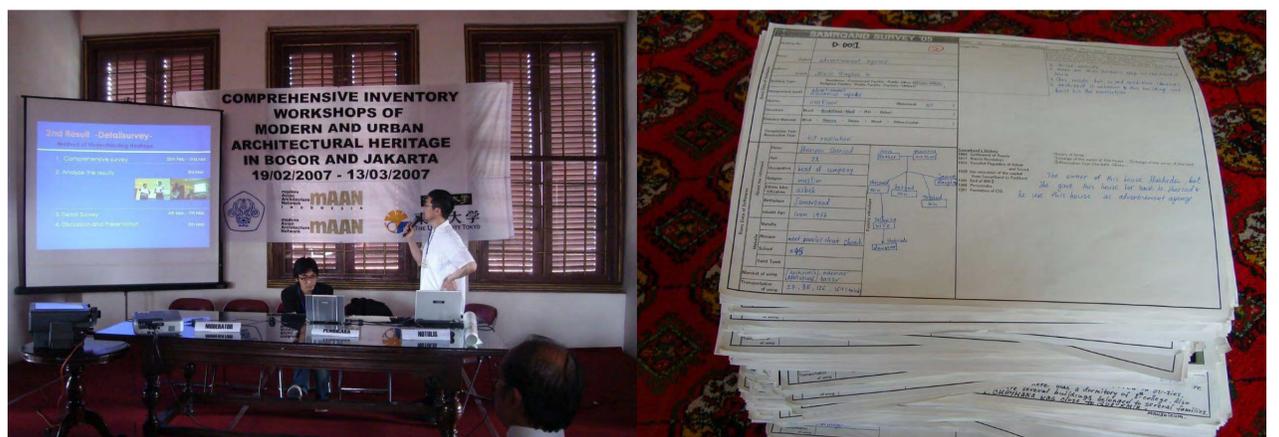
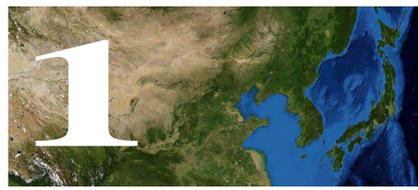


図3-1-4: ヘリテイジバタフライと介入方法 (ジャカルタ悉皆調査発表会と集めてきたデータシート)



成熟社会を支える工具としての建築史



国家を超える



建築を超える



保存を超える

3.2 記憶の保存

3.2.1 記憶の伝承と建築の保存

記憶はもう存在しない過去の出来事であり、人々がそれを想起することによって再現される。記憶が世代を超えて後世へ伝授されるためには、記憶が留まる場所が必要である。

記憶が留まる場所として建築は、物理的な場所に存在し、それ自身が記憶を有していると同時に、記憶を集約させ、それを伝承する媒体となる。記憶という観点から言うと、建築の保存は、記憶を具現化して次の世代に繋ぐ役割を果たしている。

しかし建築に集約される記憶は、社会的背景など外部による操作が可能な流動的なものである。ここでは2つの事例を通じて、建築に投影された記憶の操作やその意味について説明する。

3.2.2 記憶の清算：旧朝鮮総督府庁舎の撤去（韓国）

①旧朝鮮総督府の記憶

旧朝鮮総督府の記憶は4つに分けられる（図3-2-1～3-2-4）。



図3-2-1：「朝鮮総督府庁舎」時期の旧朝鮮総督府、写真は1926年代の修学旅行写真（出典：朝鮮日報DB）。1926年建てられたこの建物は植民地政府の象徴であり、近代化されたソウルの象徴でもあった。



図3-2-2：「中央政府庁舎」時期の旧朝鮮総督府、図は1948年総選挙ポスター。1945年独立後、韓国の初代国会が行われた場所でもあり、独立国家・独立政府のシンボルとしてこの建物の絵を用いた選挙ポスターや切手などが製作された。



図3-2-3：「国立中央博物館」時期の旧朝鮮総督府、図は博物館の入場券に描かれた旧朝鮮総督府庁舎。1988年オリンピック開催を目前に、海外向けの国家宣伝を目的に博物館へ用途を変え一般に公開された。



図3-2-4：「旧朝鮮総督府庁舎」として壊された建物の後ろに景福宮が見える（出典：朝鮮日報DB）。1995年光復（独立）50周年記念式典で尖塔が切断され、1996年に完全に撤去された。

②記憶の清算

この建物に対する韓国国内の評価は、国政や社会的状況によって変わってきた。1963年、朝鮮戦争以来廃墟になって放置されたこの建物を修復する際には、経済的理由より建築的価値が優先された記録が残っている。

しかし、1990年代には建築界の中でもこの建物の建築的価値に関する意見が大きく分かれ、1993年韓国政府は「間違った過去の清算」としてこの建物の撤去と景福宮の復元を発表した。植民地時代の「記憶の清算」と朝鮮という伝統の伝承は当時韓国政府の正統性の宣伝に用いられた（図3-2-5）。

③「撤去という保存」

旧朝鮮総督府庁舎の場合、建物の記憶の一部が強調され、それが建物の撤去に大きな影響を与えた。記憶の清算＝建物の撤去は社会と国家による継承する記憶の選別作業であった。

しかし、旧朝鮮総督府庁舎の撤去は韓国社会において「植民地時代の記憶の清算」という新たな記憶を生み出し、その後の植民地文化遺産に対する保存意識形成に大きな影響を与えたことは明らかである。

3.2.3 記憶の移植：クイーンズ・ピアの保存運動（香港）

①クイーンズ・ピアの記憶

クイーンズ・ピアは1925年イギリス帝国によって儀式用の埠頭として建設され2007年に撤去された。クイーンズ・ピアの記憶には2回の歴史的断絶が存在する。1回目は1953年ヴィクトリア港の埋立て事業による移転で、クイーンズ・ピアは元の場所から移築されコンクリート造の埠頭に建替えられた。1997年には香港返還によって、約72年間果たしてきた儀式用の埠頭としての機能を失った。この2回の歴史的断絶はクイーンズ・ピアに対する建築的評価に大きく影響を与えた。

しかしクイーンズ・ピアには市民の集い場という新たな機能が生まれた。場所が持つ元々の記憶ではない新たな記憶がこの場所

に宿ることになった（図3-2-6, 3-2-7）。

②映りこんだ記憶

香港の市民運動の歴史は1960年代までさかのぼるが、近年最も激さを見せたのがクイーンズ・ピアの保全運動であった。そしてその連続線上にあるのはスターフェリー・ピアの保存運動である。香港市民の利用頻度が高く多くの人に親しまれたスターフェリー・ピアの撤去に反対した市民達は、2ヶ月余りの保存運動にも関わらずスターフェリー・ピアが取り壊された後、その活動の場を隣にあったクイーンズ・ピアに移した。2つの建物は約100mほど離れた場所にあり、二つともヴィクトリア港の埋め立て計画によって取り壊しが決定された。クイーンズ・ピアに新たに宿った記憶は、元々市民たちに親しまれたスターフェリー・ピアからクイーンズ・ピアへ映りこんだものであった。

③新たな記憶の保存価値

香港古物古跡局の報告（AAB: Antique Advisory Board）によるとクイーンズ・ピアの保存価値は建築的価値に基づいて評価された。それに対し保存運動を主導した本土行動（Local Action）は、クイーンズ・ピアは香港市民の集い場・抵抗の場であり、それを新たな保存価値として認めてくれることを主張した。クイーンズ・ピアは物理的・社会的変動によってその場所が元々持っている記憶は薄まれた。しかし、建物には新たな意味や象徴性が生まれ市民らはそれを新たな記憶として建物に投影させ、それを伝承しようと試みた事例であった（図3-2-8）。

3.2.4 記憶と建築保存の可能性

今まで記憶の操作は、その社会のアイデンティティーを形成、維持するための手段として、社会内部の力関係によって行われてきた。その一例が旧朝鮮総督府庁舎の撤去である。

しかし建築保存運動を通じて社会構成員自らが小さな記憶の操作を試みたクイーンズ・ピアの事例は、新たに生まれた記憶が社会の同意を得て社会の「記憶」として位置づけられる可能性を示唆している。



図3-2-5：旧朝鮮総督府、今も撤去された建物の一部が独立記念館で展示されている

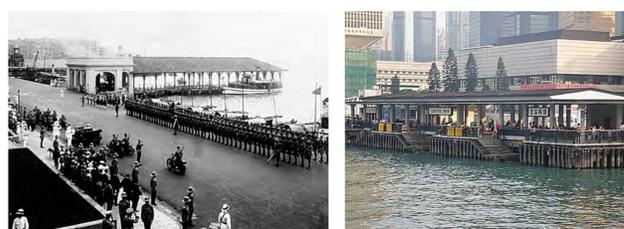


図3-2-6：1926年頃、クイーンズ・ピアの前で儀式が行われている（出典：香港公文書館）
図3-2-7：1995年、撤去前のクイーンズ・ピア（出典：本土行動）



図3-2-8：クイーンズ・ピア保存運動（出典：本土行動）

ぼくらはまちの探検隊

「まちリテラシー」の構築と普及



1. ぼくらはまちの探検隊とは？

- はじめに

東京大学生産技術研究所村松研究室と渋谷区立上原小学校の協働で、2004年に始まった「ぼくらはまちの探検隊」の活動は、今年で8周年を迎えた。毎年変わる隊員（小学6年生）や隊長（大学院生）の顔ぶれに対応しながら、プログラムや方法論を洗練させている。今後は本活動を他の大学や国内外の地域へ普及させたいと考えている。

本年度も前年度に引き続き、研究室や大学の枠組みを越えて幅広く学生を募った。それに従って探検の指令も、村松研究室が専門とする建築・都市の歴史のみならず、建築計画、都市計画、人のつながりなど切り口が多様化し、前年度までの蓄積と合わせ、体系化が進んでいる。本活動は東京大学の学部および大学院の授業科目に認定され、隊長・副隊長たちによる毎回のレビューを行なうと共に、成果報告会を設け、大学院生の活動成果としてより学術的な洗練を目指している。

2. 活動概要

- 内容

子ども達と大学院生が一緒にまちを探検しながら、まちを観察・分析し、「いい里まち」とは何かを考え、自ら責任を持ってまちに関与していくことを学ぶプログラム。

- 目的

1. 「まちリテラシー」の構築と普及

住まい手である子ども達が、自分たちのまち（「里まち」）の再考・発信を通して、自らの視点でまちを評価し識別する力「まちリテラシー」を養う。

2. 専門教育への貢献

都市・建築をはじめ様々な専攻の学生が、自らの興味・研究テーマをまちに重ねて、住まい手である子ども達と共に再考し、都市理解の手法や社会との連携方法を学ぶ。

3. 地域社会への貢献

大学と地域の連携を図る。

- 探検範囲

上原小学校の東側を通る上原仲通り商店街を中心に、500m程度の圏内を目的に合わせて1、2時間で探検する。過去には、普段立ち寄らないモスク（東京ジャーミイ）や、駒場野公園まで足をのびたチームもある。

- 探検隊メンバー構成

【統括】活動の指揮を執る。

… むらまつ博士（村松伸）・上原小学校長

【コーディネーター】活動の企画、調整を行う。

… 修士2年の学生（2人～3人）

【サポート】探検中の安全確保、子どものサポート。

… 6年担任・小学校PTA

【隊長】指令と探検方法を考案、リーダーとして統率。

… 主に修士1年の学生（各チーム1人、4～6人）

【副隊長】隊長を補佐しながら、子どもたちを率いる。

… 学生有志（各チーム2～3人）

【撮影隊】活動の記録を撮影編集し、DVDを作成する。学生有志

- 活動の成果

1. 「まちリテラシー」の獲得

子ども達のまちに対する関心が増大。子ども達が各自のチームで得た成果を、一つのまちの見方として獲得する。

更に、秋に行う探検隊の復習授業は、チームを越えてまちの見方を共有し、まちにある多様なものごとのバランスを考える機会となる。

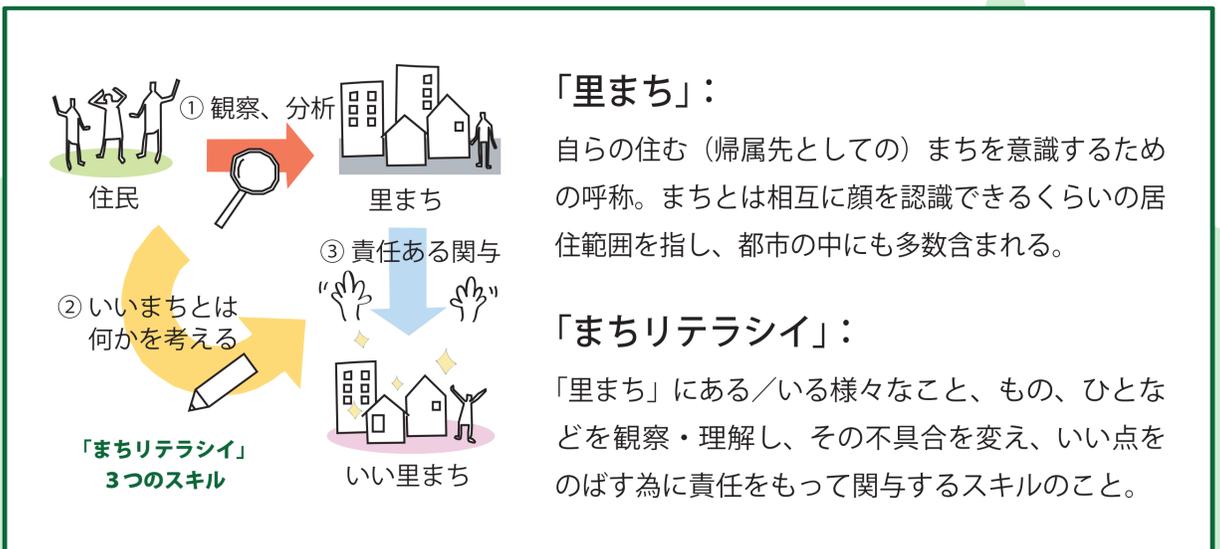
2. 地域とのコミュニケーション

子ども達と学生が、探検という形で、まちを歩き、会話や聞き取りなどを行うことで、地域内でのコミュニケーションが活発化している。毎年活動を継続することで、地域にも、子ども達の探検を受け入れサポートする姿勢が馴染むようになる。

3. 「まちリテラシー」教育プログラムの構築とその普及

未来を担う子ども達へまちの見方を教える方法論の確立。上原小学校でのプログラムを他大学とも連携して他の地域へ普及させている。

- 活動履歴



「里まち」:

自らの住む（帰属先としての）まちを意識するための呼称。まちとは相互に顔を認識できるくらいの居住範囲を指し、都市の中にも多数含まれる。

「まちリテラシー」:

「里まち」にある／いる様々なこと、もの、ひとなどを観察・理解し、その不具合を変え、いい点をのびす為責任をもって関与するスキルのこと。

3. 活動プログラム

事前準備	0. 指令作成	各隊長は自らがまちに対して抱えている疑問や関心を切り口に、まちを観察・分析する方法、まちとは何か理解する方法、それらを通してまちへ関与する方法を考え、指令を作成する。	自らの専門分野からまちに対してできることを模索する。	
	1. 指令発表 指令解説	子ども達は博士から指令を受け取り、まちを探検して指令を達成するよう任命される。隊長は子ども達に指令を解説する為のヒントやキーワードを与え、まちを見る新しい視点を提示し、子ども達が興味を持って主体的に探検できるよう誘導する。	子ども達に興味を持たせ、理解と自分の意図をつなげる方法を考える。 指令により新たなまちの側面に対して興味・関心を持つ。	
	2. フィールドワークとは？ 分類ゲーム	まち探検とは何か、講義をする。探検に必要な道具や方法、何を使ったら何が見えるのか勉強する。分類ゲームでは、30枚の写真を各チームに配り、何かしらの分類をしてもらう。バラバラな中にもあらゆる共通点があることを理解する。	まちを観察・分析するための様々な観点を獲得する。	
	ぼくらはまちの探検隊	3. まち探検	子ども達、隊長、副隊長からなる複数のチームが指令に基づいた新たな視点でまちを実際に歩き、直接見たり、触れたり、嗅いだり。そこで感じたことや発見したことを記録し、またインタビュー、実地調査などを経験する。	子ども達はまちをどう感じているのか、自分との意識の差を知る。 まちの人やモノ、場所と繋がりができ、関与の第一歩となる。
		4. 分析、議論	これまでの探検で得た知見をチームの皆で共有・整理し、何が論点なのか整理する。疑問に思ったことをさらに深く調べる方法、計画を主体的に考える。	自分のテーマや考え方が本当に良いのか自問、再認識する。 自分の意見を持ち、異なる意見の人との議論を通して価値観の違いを知る。
		5. 発表準備	子ども達は探検で発見したこと、分析した結果、それらから考えたまちへの関与（方法、実施内容）を他者に伝えるための方法を考える。隊長は、発表の構成、成果物作成のアドバイスを行う。	見せ方、作り方を学び、他者への伝え方を考え、伝える必要性や楽しさを知る。
	復習授業	6. 発表	東京大学生産技術研究所のオープンキャンパスにあわせて発表会を開催する。子ども達は、地域住民や研究者の前で成果を発表し、質問やコメントをもらう。	他の班の成果や審査員の意見を聞く中で、自分のテーマを客観視する。
7. 復習授業		探検隊で獲得したまちの見方の成果を全員で復習する。コーディネーターや隊長は、復習授業でディベートを行ったり、再編成したチームで他チームの指令の理解して新しい指令を解いたりして(2011年度)、チームを越えた議論を促す。	私個人は上原のまちをどうしていきたいのか、何ができるのか考える。 ひとつのデータや問題に対しても、異なる見方や意見があることを知る。	

4. 活動アーカイブ

- 過去の指令

各隊長は、自分の専門分野、疑問、関心を切り口にまちの見方を考えながら指令を作る。この指令が、その後の探検のなかで、まちへの関わり方を考える軸となる。

過去の指令を、建造環境・自然環境・社会環境の3領域で大別すると右の表ようになる。

指令に比喩を用いているのは、これから始まるまち探検に謎解きの面白さを加えるのみならず、まちを従来とは異なる視点から捉えることを促すためである。

- 受賞履歴

JIA ゴールデンキューブ賞 2011 特別賞

建造環境	このまちはいろんな姿をしている。そのまちをさわるにはどうしたらいいだろうか？	自然環境	まちの住民を探さない	建造・自然	まちの顔を探さない
	まちの骨格を知りなさい		このまちは変身し続けている。その秘密をあばきなさい。		坂のお客さんをふやしなさい
	まちのすきまを着せかえなさい		living greenを訳しなさい		まちの凹凸を探さない
	まちを下町の長屋にしなさい		まちの家系図をつくりなさい		まちの地面の幽体離脱を探さない
	まちの呼吸を助けなさい		まちの開花を告げなさい		川のフタをあげなさい
	まちのマッサージしなさい		まちのパーズデイを探さない		まちのアクセサリをみつけなさい
	まちの時間をつかまえない		まちのガイコクを探さない		まちのつぎはぎを見つけない
	まちの建物に隠された暗号を解きなさい		このまちのオバケを探さない		まちのにおいをつくりなさい
			まちの転校生を探さない		まちに隠れた演奏者を探さない
			まちのカルテをつくりなさい		まちの舞台を演出しなさい
			まちの給食を作りなさい		まちのガーディアンを探さない
			まちのなわばりをみつけなさい		探検で休める場所を探さない
	まちの落とし物を探さない	まちに隠れたともだちを探さない			
	まちに安心の花を咲かせなさい	まちの中心となるへそを探さない			
	まちの味を探さない	みんな違ったマチメガネをかけている、いろんなメガネをゲットしなさい			
	まちとぼくらをきずなで結びなさい	ぼくらはまちの催眠にかかっている、催眠術師をつかまえない			
	まちのルールを作りなさい	まちのともだち遺産を選定しなさい			

あか

土地の声をよみがえらせなさい

上原が現在の姿になるまでに土地の姿は様々に変化してきた。現在はコンクリートで土地が覆われているが、土地の歴史を辿るとさまざまな土地の姿があったことがわかる。かつての上原の土地と現在の土地を比較し、どのような土地の声を蘇らせる事が上原の自然や生き物の環境を豊にすることに繋がるのかを話し合い、上原のまちへの提案をまとめた。



みどり

上原を古代ローマのテルマエにしなさい

緑チームは上原の街の中で、複合施設のあり方をテーマに掲げている。今回はまちの施設同士のつながりをつくることで人をまち全体に移動させることを目指した。上原で古代ローマのテルマエをどうよみがえらせるか？子ども達なりに提案をしている。



あお

上原の原石をみがきなさい

上原のまちには、「原石」と「宝石」が存在している。こどもたちはまち探検をしながら「原石か？宝石か？」を1人1人見極めていくなかで、子ども達の美意識を育む事を目指した。



ピンク

まちのクレヨンをつくりなさい

ピンクチームは、「色」をテーマにまちを探検した。どのようにまちをカラフルにするか提案するために上原の色の現状を観察・分析し、色のタイプごとにまちを4つに分類。それぞれの場所についてどのような色が望ましいか、「上原の色のガイドライン」を作成。まちの印象だけでなく、人々に与える気持ちをもかえる事を目指した。



オレンジ

まちの季節をつかまえなさい

オレンジチームは、「季節」をテーマにまちを探検した。「上原にしかない季節は何だろう？」「季節をつかまえるにはどんな方法があるだろう」。季節の移り変わりを観察することで、より深く上原を知る事を目指した。



ぼくらはまちの探検隊 in 大槌 2011

「ぼくらはまちの探検隊 in 大槌 2011」は、東京大学生産技術研究所村松伸研究室「大槌町復興過程記録プロジェクト」の一環として行われた。2011年12月10日、大槌町赤浜地区に集合した地元の小学生7名に、村松博士から使い捨てカメラと探検の指令が渡された。小学生と村松博士、助手として加わった大学院生と写真家の浅川敏氏が、赤浜地区と惣川地区を歩きながら、大事な風景、場所、もの、人等を撮影し、探検しながら、写真記録を行い、コメントも回収した。



子どもたちが撮影した写真



特別指令 おおつち

まちの遊びを増やしなさい

震災後、子どもたちは以前と異なる環境で生活を送らざるを得なくなっている。大槌町の小学生の多くは、海岸から離れた仮設団地に暮らし、合同仮設校舎にスクールバスで通う。特に震災後、子どもたちは屋外で遊ぶ場所がなかったり、屋外の危ない場所で遊んでいたりと、屋外で以前の遊びができなかったり、といった問題を抱えている可能性が考えられる。

そこで、まず子どもたちに探検を楽しんでもらい、そして震災後の子どもと遊びに関わる状況を記録・共有することを目的に、子どもたちに2~3人で1組のグループになってもらい、「震災後、いつどこで誰と何をして遊んでいるか」を互いにインタビューし、遊びの現状を把握した上で、現場で実際に遊んでいる姿を撮影してもらった。併せて、子どもたちが《被災後のまちで、どういった場所で何をして遊ぶことに惹かれるのか》を探り、今後につなげられる点を考察するために、子どもたちと一緒にまちを歩き、新しい遊びを考えた。

遊びを意識して撮影 (②、③) 自由に撮影 (④)

富士フィルム「写ルンです」(27枚撮り)を1人1台使用し7人で撮影、内、有効枚数163枚。事前に、カメラで撮りたい対象を効果的に捉えるためのレクチャーを実施。撮影のルールは、①1枚目は自分の顔を撮る(グループの仲間に撮ってもらう) ②インタビューで聞きだした遊びを実行し、撮影する(遊びに名前をつける) ③新しい遊びを考えたら、実行し、撮影する(遊びに名前をつける) ④その他、まちのなかで好きなもの、気になったものを撮る。

写真の主題と思われる対象を、近景(とまたち・自分、周りの大人、植物・動物、沢・水溜り)、中景(学校、街並・道、丘、坂、空き地、線路・トンネル)、遠景(海、空)に分類し、上図に示した。

浅川氏のレクチャー